

中御門王朝と閑院宮家

高田 友

禪讓とは唐土にては、天命改まりたる易姓革命に於て、天子自らの徳至らざるを恥ぢ、有徳の臣下に帝位を讓るを言ふ。名は禪讓なれど實は篡奪にして、先帝は後に殺害せらるるが常なりき。

後漢亡國の獻帝は、魏の曹丕（曹操嫡子）より禪讓を強ひらる。天子の印たる傳國の璽は、皇后これを保管す。豈圖らんや、皇后は曹丕の妹・曹節なりき。曹節、節婦にして、篡奪を悦ばず、傳國の璽を兄の使者に手交するを拒む。使者如何ともするなく、參内すること數次に及び、つひに屈服したる曹節は玉璽を使者に向けて抛擲したりしとの由。

獻帝は曹丕の妹婿なるを以て生を保ち、曹節と偕老同穴の契をこそ結びたりけれ。

しかれども、我が大八洲は神國なるに由りて、天命はとこしへに改まるの段これなし。而して、禪讓とは單に讓位を指稱す。

靈元院は小倉事件にて一宮を斥け給ひ、五宮朝仁親王に禪讓あらせらる。一六八二年、前皇太子を廢嫡し、五宮を儲君として立太子の禮を行はる。己而三百年、立太子禮の儀は例を見ず。すなはち、一三四年南北朝の世に、花園天皇皇子・直仁親王、崇光天皇の皇太子とて立太子禮を行ひたまひけるが、後來南朝に拐帶せられて賀名生（發音アノウ）に移され給ひ、登極の段なかりき。今、その儀復活す。

朝仁親王儀、立太子の五年後に踐祚あらせられ、東山院とならせたまふ。靈元院治天（院政）。柳營（幕府）にてはこれより前、一六八〇年、家綱薨去して、綱吉征夷大將軍襲職のことありき。

江戸の朝幕關係は複雑怪奇なり。家康の晩年、天海僧正並びに藤堂高虎を招きて語らひけるに、天海の曰く、「天子、形骸ばかりとこそは申せ、將軍の上にましますは、幕府の威を損ずる、甚だしきものあり。皇家は須く廢絶すべし。神宮の神官と爲して、伊勢に放逐するに如かず」と。家康、奇貨措くべからずとや思ひたりけん、「宜なる言ひ條なるかな。汝の言やよし」と。時に二千三百年に垂々とするの皇統、家康の一存にその存廢を委ぬるに至る。

茲に、高虎、諫めて曰く、「然らず。主上は神の裔にておはします。征夷大將軍は、神の裔より宣下を受くるによりて尊きなり。これを廢して、御自ら征夷大將軍と名乗りたらんとも、武家より百姓に到るまで、崇め奉るの段なきに至らん。加之、自ら任ずるを得んとならば、大名小名謀叛を企つるに、悉皆將軍を僭稱するに相違なし。藪をつつきて蛇を出したまふなかれ」と。

家康、酷薄の人なりといへども、愚昧にはあらず。高虎の諫言を容れて、國體變革の大逆を思ひ留まりたるにより、後難を免れたりとぞ傳へらるる。天海の宿世如何ならん。

かくして、靈元院讓位あらせられ、翌年（一六八九）元祿と改元せらる。花の元祿は、主上東山院、大樹は綱吉なりき。此の時に方りて幕府は五代、もはや家康の治世とは異なり、諸大名、朝家の御稜威に縋りて幕府を覆滅せんとの愁ひ無之、綱吉は只管萬乗の君を尊崇し奉る。

忠臣藏、松の廊下的一幕に、傳奏屋敷のことあり。敕使院使はいづれも傳奏屋敷に逗留す。敕使は東山院、院使は靈元院の差遣せられたるなり。

正月に、幕府より朝廷に年賀の挨拶を上つりしかば、三月に答禮の御使者おはしますなり。一七〇一年（元祿十三年）新春の賀に上洛したる柳營の使ひは、思ひきや、吉良上野介其人なりき。

松の廊下の刃傷の後、關白近衛尙嗣（後陽成院皇孫／皇別攝家）の日記に、上野介、刃傷せられたりとの儀を聞き給ひ、天顔晴れやかに、「御喜悅の旨、仰せ下し了んぬ」と記されたり。臆測するに、上野介、拜謁の折に、幕府の威を誇りて、不敬の儀ありたるに相違なし。東山院、上野介を惡みたまへりと察せらる。

東山院は一七〇九年（寶永六）、三十五歳にて早世したまふ。御父靈元院は在世しておはします。二年前、一七〇七年（寶永四）には、富士山噴火して寶永山噴出することあり。この年、南海東海大地震、翌年（一七〇八）には京都大坂大火・京畿大洪水ありて、凶事相重なる。

一七一八年（享保三）、既に將軍は吉宗なりしかど、院政に復したまひける靈元院より、崩御せられし東山院の皇子（新帝中御門院の皇弟／靈元皇孫）秀宮直仁親王に閑院の號を賜り、世襲宮家創設せらる。（直仁親王、三百年前の皇太子と御名を同じうす）

「四世襲親王家」といへるあり。伏見宮・桂宮・有栖川宮・閑院宮の謂ひなり。伏見宮は代々當家の皇子相續したまひけれど、桂宮は皇子出生なく父子相傳叶はずして、皇家より養子を迎へて存續す。有栖川宮家は明治の御代に續きたれども、彼の熾仁親王（和宮許婚）に皇子なく、後を繼ぎたる異母弟・威仁親王また後嗣なきを以て斷絶す。

閑院宮家は、江戸末期に斷絶したれども、明治大帝の聖旨に據り、伏見宮家より戴仁親王を養子に迎へて再興す。戴仁親王は參謀總長と成りて軍國の首魁と化したまひけれど、終戦三箇月前に薨去あらせられたれば、戦犯となりて縄目の御恥辱を受くるを免れたまひぬ。

東山院を嗣ぎたまひけるは、直仁親王の御兄・慶仁親王。すなはち中御門院二四代におはします。「中御門」なる追號は、平安朝大内裏の外郭門たる待賢門の異名なり。御裔は中御門院より始まりて、五帝を出したる後斷絶して、閑院宮家より光格院（直仁御孫）を迎へ奉る。時に一七七九年（安永八）。

（平成三十一年三月十五日受附）